論　文

綱淵謙錠『苔』（たい）に見る会津人

――転換期の歴史小説考――

山　崎　一　穎

The people of Aizu in the book “*Tai*” by Kenjo Tsunabuti

――A study on historical novels of the turning point――

Kazuhide YAMAZAKI

（序）

本学の観光マネジメント学科の教員・学生諸君は、会津支援に奔走している。本学と会津若松市は平成二十四年（二〇一二）パートナーシップ協定を締結した。学科の教員・学生は会津女性の精神文化にスポットを当てた〈人物観光〉という新視点から様々な取組みをしている。

二十五年（二〇一三）四月十四日（日）、「時代を先駆けた教育者新島八重、跡見花蹊と会津の教育文化」というテーマで、本学学長山田徹雄氏をコーディネーターとして、会津藩校日新館の館長宗像精氏と私とが対談した。

会津鶴ヶ城落城後、斗南藩へ移住を決めた人たちの生き方を通して、失敗に終わった斗南への移住の責任の取り方を問題にした小説を考察することで、人物観光に寄与したい。

（一）思案橋事件

明治九年（一八七六）十月二十九日、東京府第一大区十四小区日本橋小網町一丁目の思案橋下で船中の旧会津藩士らと巡査とが斬り合う事件が起きた。いわゆる〈思案橋事件〉である。『警視庁史』は次の様に記している[(1)]。

思案橋事件

新政府に対する反感は、佐賀、神風連等あい次いで騒乱となつてあらわれたが、その後もあとを絶たず、旧会津藩士永岡久茂等の一派もまた同様で、かねてから前原一誠と気脈を通じ、もし事をあげる場合は、東西相呼応してけつ起すべく、同志とともに本郷湯島天神の近くに住まい、手習師匠を装い、機会をうかがつていたところ、明治九年十月二十五日、萩の前原一誠から「四五ニチコロカイテン、ニシキノ、ミセヒラク」との電報に接し、いよいよ事を決行する日が迫つたことをさとり、すでに計画したとおり、まず、千葉県県庁を襲撃して公金を奪い、次いで茨城、栃木の両県下において同志を集めつつ、新潟県下にいたり、前原一誠等一派と合流して反旗をひるがえすべく、明治九年十月二十九日の夜井口新次郎（ママ）、竹村俊秀、中原成業等十数名の者を芝山内に集め、ここから日本橋小網町一丁目の思案橋際にある陸運会社出張所の武田喜右衛門方に向い、下総登戸行の舟を仕立てさせて出船の用意中、彼らの行動に怪しい点が相当あるのを知つた船頭は、ひそかに交番へ訴え出た。訴え出を受けた巡査は、直ちにこの旨を本署へ連絡、本署からは寺本義久警部補、河合好直二等巡査、木村清三および黒野巳之助三等巡査等の四名を現場へ急行させた。

まず、寺本警部補が彼らに近づき、不審をただそうとしたせつな、賊は洋傘に仕こんだ白刃を不意に抜き一刀のも

とに寺本警部補を即死させ、次いで河合、木村の両巡査にもそれぞれ重傷を負わしたが、幸いにも黒野巡査が難をのがれたので、急を本署へと告げた。

本署においては、待機中の警察官全員を召集、直ちに現場へ急行、まさに逃走しようとする舟に飛びうつり、危険をおかして六名をまず逮捕した。

しかし、他の者はいち早く逃走をくわだてたので、警察官は数隻に分乗してこれを追跡、午前三時ごろ、深川区上佐賀町一丁目先で五名の暴徒を乗せた小舟を発見、仙台堀に逃げる暴徒を水陸両面からきよう撃しようとすると、暴徒はおのおの刀を抜いて「寄らば斬るぞ」と大声でさけびつつ万年橋へと舟を向けた。

このとき暴徒の一人はもはやこれまでと観念したのか「われわれはこれまでである。手向いはしない。武器を受けとつてもらいたい。」と神妙に脱刀して差出したのでこれら五名を逮捕した。

なお、その場で逮捕をまぬがれ逃走した横山俊蔵、中原成業等一味六名はその後東京で、また松本正直、満木清繁等三名は新潟県でそれぞれ逮捕され、翌明治十年二月七日に暴徒の一味はそれぞれの刑に従つて処断され、ここに思案橋事件は落着したのである。

なお、思案橋事件のため、明治九年十月三十一日権大警部横山勇蔵以下二十名を千葉県下に派遣して警戒にあたらせ、同年十一月十六日事件落着によつて帰京した。

三宅雪嶺の『同時代史』(2)の明治九年の条に次の記述がある。

> 尚ほ今回の変乱（明治９年10月24日の神風連の乱、10月27日の秋月の乱、10月28日の萩の乱――山崎注記）に関聯して思案橋事件を附記すべし。前原より「ニシキノミセビラキ」といふ電報の到来し、十月二十九日、永岡久茂等十余人東京新富座に会し、房総の野に兵を挙げんとて、前原に「ニシキノシテンコンニチヒラク」との電報を発し、思案橋より船にて千葉に赴かんとし、小舟五隻に分乗し、未だ発せず、船宿の主人木村文七が警察署に密告し、警部補が巡査三名を隨へ来りて糺問し、永岡等は初め言を左右に托し、漸く遁るべからざるを知り、一人が刀を抜いて警部補を斬り、他も刀を揮ひ、巡査二名倒れ、一名重傷を負ひながら火の見梯子に登り、半鐘を鳴らして急を報じ、同志は前後して縛に就き、一人は遁れ、鹿児島に赴く。永岡等の事は僅かに警吏数人を斬りて斬罪懲役等に処せらるゝに終れるが、事は戊辰役に胚胎し、会津士族の鬱憤よりし、人物は必ずしも軽んずべからず。世が世なればといふ所にして、会津藩に相当の役を勤め、落城後に何等か成す所あらんとし、同藩士秋月胤永及び僧癡塊（会津真龍寺住）を通じて奥平謙輔と交はり、延いて前原に及び、共に相ひ許す所あり。尚ほ前原は越後に在勤して恩を施し、民心を得ること少からず。（圏点山崎以下同じ。）

（二）綱淵謙錠『苔（たい）』を読む

（１）

『苔』は「思案橋事件」で斬死した旧会津藩士らの菩提を弔う〈掃苔行脚記〉である。小説は一見掃苔行脚に絞られているように見えながら、何故永岡久茂が「思案橋事件」を起さなければならなかったに及んでいる。

『苔』全12章の構成を記す。

1　思案橋下で船中の兇徒突如警官を斬殺。
2　会津藩士を反乱に駆立てた心情。関係者全員逮捕、ただ一人逃亡した中根米七の運命如何。
3　駒込の染井霊園に警部補寺本義久の墓所探訪。殉職警察官寺本の顕彰碑の意味。
4　旧会津藩士井口慎次郎の処刑の状況。
5　叛徒井口慎次郎、竹村俊秀、中原成業斬罪。市谷富久町の源慶寺に三人の墓を弔問。
6　台東区今戸の称福寺に思案橋事件の主謀者永岡久茂の墓を探索。不明。
7　永岡の墓は関東大震災で無縁仏となり、消滅。永岡久茂の事蹟。
8　会津藩・斗南藩に於ける永岡久茂。

9　会津人の斗南藩移住の決定とその生活。
10　移住失敗。その責任の取り方（第一の道）――山川浩。
11　責任の取り方（第二の道）――広沢安任。責任の取り方（第三の道）――永岡久茂。
12　中根米七の最期、墓所探訪――会津への旅。

小説『菩』は掃苔行脚の実地踏査による考証と作家の見解、あるいは批評から成立している。綱淵謙錠は『菩』執筆にあたって、尾佐竹猛『法窓秘聞』（昭和十二年九月三十日、育成社。のち復刻版が一九九九年一二月一〇、批評社から出版）を資料として使用している。復刻版の帯に「明治政治裁判史の第一級資料！／山田風太郎、『明治小説全集』諸作品の原本!!」と記されている。作家はなかなか使用した資料の存在を一部しか明かさない。思案橋事件については、尾佐竹本が詳細を極めている。それ故、私は綱淵の『菩』の原資料と見ている。余談であるが、司馬遼太郎の場合、徳富蘇峰の『近世日本国民史』からの引用が多い。

綱淵は２章で会津藩士を反乱に駆立てた心情分析に当って、まず歴史的事実を押える。

明治四年（一八七一）
　七月　廃藩置県の詔書公布
十一月　若松県成立
明治七年（一八七四）
　二月　陸軍省の命令により鶴ヶ城の破却告示
明治九年（一八七六）
　八月　若松県は福島県に合併

綱淵は「旧会津藩士の望郷のシンボルであった鶴ヶ城」と記述している。一方、尾佐竹猛の『法窓秘聞』[3]から井口慎次郎の口供書「全体自分供ハ亡国ノ臣ニシテ既ニ世ニ面目ヲ失シ候ニ付何事カ以テ国家ニ尽シ汚名ヲ雪カント夙夜苦慮候（中略）政府ノ措置宜キヲ失ヒ維新ノ目的ト名実相反シ外人ノ跋扈日一日ヨリモ甚シク国憲ノ振ハサルコト如此ナレハ」――を問題とする。口供によれば政府の失政と外国人跋扈に批判が集中している。本来なら会津人のエートスとしての攘夷思想を問題とすべきであるが、綱淵は会津藩士のパトスを問題とする。

綱淵の心は「望郷のシンボルであった鶴ヶ城」の破却、会津から斗南へ、そして「亡国ノ臣」、「流浪の民」として生きなければならぬ会津人を捉える。綱淵は彼らの行動を支えた心情を次の様に捉える。

> 明治九年十月、思案橋事件段階では、もはや会津には憎悪とか怨念といった主情的雰囲気以外、士族反乱を起爆させ、それを成功に導くべき実質的基盤は何も存在しなかったといってよい。

そしてそのことを主謀者である永岡は意識していたはずであると言う。なぜならば反乱計画があまりに粗雑で勝算のない戦いをあえて実行に移したと見ている。そして

> 無謀な行動にかれらを駈り立てた感情は、自分を〈亡国の臣〉と看做す、いわば流民意識から滲み出た悲愴感だったかもしれない。

と結論付けている。さらに綱淵は斗南藩少参事をつとめた広沢安任（やすとう）が新政府から再三出仕を勧められ、「亡国の臣、何の面目あって勤王諸藩の士と肩を比し、朝に仕えんや」と固辞したことを例に挙げている。

熊本の神風連の乱、福岡の秋月の乱、山口の萩の乱（前原一誠の乱）と呼応して起した思案橋事件を一括して不平士族の叛乱と位置付けるのは正しくない。思案橋事件の暴徒はあくまで「亡国の臣」という意識で行動しているからである。

（２）

新政府は会津藩へ戦争責任者の首を差出すことを要求した。藩主松平容保（かたもり）は「首謀者は余である」[4]と主張して譲らなかった。閉口した新政府は「容保の死一等を宥して首謀者を誅し、以つて非常の寛典に処する」旨の勅旨を発した。会津藩で戦争責任者と言えば、「上席家老の田中土佐、神保内蔵助、西郷頼母、萱野権兵衛の四人」である。田中、神保自刃して果て、当時、西郷が行方不明であったので萱野が一藩の責任を負って明治二年（一八六九）五月切腹した。

九月、松平容保の禁錮が解かれ、家名の再興が許され、慶三郎をもって家名を立てることが許可された。新政府は家名の再興にあたり、「猪苗代または陸奥の北部にて三万石を賜わる」旨の内意を伝えた。

会津では上席家老に代って、山川浩、広沢安任、永岡久茂が藩政を掌ることになった。猪苗代か陸奥の北部か、藩論の決定を迫られた。山川、広沢、永岡らは陸奥へ移住のほか二心なきことを証明する道はないと考えた。一方若松在住の人は移住に反対であったが、永岡と町野主水との刃の対決に及んで、一挙に斗南移住に藩論が決定し、その内申によって斗南立藩の勅旨が出たのである。

『明治史要』[5]の明治二年（一八六九）十一月三日の条に次の様にある。

松平容保ノ子容大（慶三郎）其先祀ノ承キ、陸奥ノ地三万石ヲ管セシム（明年七月ニ至り、斗南藩ト称ス）

「太政官日誌／東京宮中日記」

山川浩権大参事[6]、広沢安任小参事、永岡久茂少参事の三人が斗南藩首脳部として責任を負わなければならないのは当然である。

斗南の領有地について、「斗南藩の領有地は二戸郡金田一以北の三戸・五戸・野辺地・田名部通であり、そのほか北海道の胆振国山越郡等四郡がその支配下にあった。八戸藩と七戸藩の領土がはさまり、南北に分断された斗南藩領―それは、魚にたとえれば、おいしいところはすべて除かれ、頭とシッポを与えられたようなものである[7]」と記している。

現在の下北半島の下北郡、上北郡が斗南藩の領地である。二十三万石の会津が三万石に減封され、下北へ飛ばされたのは新政府の会津藩に対する懲罰である。京都守護職だった会津藩支配の新選組によって斬殺された長州藩の怨念は、戦後処理に於いても苛烈に働いている。現在、下北半島は原子力船「むつ」の母港であり、原子力廃棄物の貯蔵地であり、恐山の「いたこ」の地でもある。この地へ会津は〈挙藩流罪〉として移住を命ぜられたのである。

斗南へ移住を決定し、斗南開拓へ夢と希望を託した会津の人々を綱淵は次の様に記している。「現実としての斗南の自然環境はそのような夢をせせら笑うかのように、四千三百三十二戸、一万七千三百二十七人の移住者を飢えと寒さで手厚くもてなした（傍点原文のまま）。

斗南での生活の実態は、柴五郎の『ある明治人の記録[8]』を一読すれば明らかである。その一節を次に記す。

餓死との戦いの日々、父から「会津の敵討つまでは此所も戦場なるぞ」と叱られつつ、犬の肉を喰らい、木の根を齧った日々を回想している。明らかに下北移住は失敗であった。本来移住に選択の余地などなかったはずである。それを承知で綱淵は移住を決意した山川、広沢、永岡の身の処し方を問う。ここが作家の真骨頂である。それぞれの人の生き方と関わるからである。

（３）

斗南藩は廃藩置県（明治四年〈一八七一〉七月十四日）により、斗南県と改称された。九月、弘前県に合併され、十一月、府県の統廃合により青森県となった。こうなると斗南へ移住した人々は、目的を喪失し離散していった。

山川浩は廃藩置県後上京し、ほぼ二カ年ほど浪々の生活を送ることになる。この間、山川が何を考え、何を為そうとしていたか不明である。明治六年（一八七三）七月、谷干城（土佐出身）の推挙により陸軍省に出仕、七年（一八七四）二月佐賀の乱（江藤新平）が起るや、谷干城の下で陸軍少佐として活躍する。異例の昇進である。

綱淵は「きのうまでは〈薩長政府顚覆論者〉だった山川浩が、なぜこの段階からいわゆる体制側に参画し、藩閥という重い圧力に耐えながら顕官の地位を得ようとして行ったか」を考えたいと問題提起をする。そして「斗南藩経営の失敗にたいする責任の取り方という観点から」考えたいと述べている。無論「三人（山川、広沢、永岡を指す）がその責任問題について何か特別に言い遺しているという資料はない。しかしこれら三人がその後にたどった人生行路がそれについて何かを物語っているような気がしてならぬのである」と記している。綱淵謙錠の『苔』の眼目はここにある。そして期せずして三人三様の生き方が、斗南藩移住の失敗に対する責任の取り方として興味ある問題を読者に提供することになる。

山川浩（一八四五―一八九八）は、陸軍大佐のまま明治十九年（一八八六）三月、森有礼文部大臣の推輓で高等師範学校長に任じられ、女子高等師範学校長を兼務した。二十三年（一八九〇）貴族院議員（陸軍少将）に勅選された。二十五年（一八九二）五月、第三回帝国議会が開会されるや、政府の選挙干渉の暴挙を指弾する声大きく、貴族院で

も山川浩が発議者となり選挙干渉処分の建議案を取りまとめるなど、毅然とした態度を取った。

明治三十一年（一八九八）一月二十七日付の「官報」に「授爵叙任及辞令／〇明治三十一年一月二十六日。／従三位勲三等　山川浩／依勲功特授男爵」と記載があり、同月二十八日付の「国民新聞」に次の記事が掲載されている。

山川浩授爵の理由

貴族院議員予備陸軍少将山川浩氏は、今般勲功に依り、男爵を授けられ、特に華族に列せられたるが、右は単に少将として此恩命に接したるに非ずして畏き辺りには、氏が維新草創の時に際し、会津落城の砌り能く同地方民を鎮撫し、帰向する所を示し王化に服せしめたる功労を多とし、特に今回の御沙汰に及びたる次第也と漏れ承る。

山川浩は『京都守護職始末』（明治33・７）を著している。死後、弟健次郎によって出版されたが、明治三十年〈一八九七〉頃成稿は出来上っていた。この書の巻頭に孝明天皇（明治天皇の父君）から会津藩主松平容保に賜わった御宸翰と御製を掲げた。この点について『戊辰殉難追悼録[9]』に注目すべき記述がある。

『京都守護職始末』が発表されて驚いたのは、薩長土ことに長州の元老山県有朋であった。（中略）会津藩が孝明天皇の叡慮を奉じて、いかに尽力したかを証拠だてる記録であるから、薩長の攘夷運動や、倒幕運動は、孝明天皇の御意にそむいた行動であるということになる。（中略）その為山県有朋は三浦〈梧楼、陸軍中将〉を通じて、この本の刊行の自重を求め、一方戊辰戦争後逆境にあり、経済的にも恵まれなかった松平家に対し、京都守護職時代の容保の勤皇を感謝する意味をこめて、宮内省から三万円の御下賜金が出るように事を運んだ。

山県有朋の胆を冷した『京都守護職始末[10]』を世に出した山川浩の弟、健次郎について記す。山川健次郎（一八五四―一九三一）の略歴について、三宅雪嶺の『同時代史』第六巻の昭和六年の条に依れば、藩校日新館に学び、戊辰の役白虎隊に編入、年少にて除隊。僧真竜寺智海に従い脱走し、越後の権判事奥平謙輔の書生となる。明治三年（一八七〇）北海道開拓使より露国留学を命ぜられ、翌年改めて米国留学となり、エール大学で物理学を修め、八年（一八七五）帰国、九年（一八七六）東京開成学校教授補となり、十四年（一八八一）東京大学教授、二十六年（一八九三）東京帝国大学理科大学学長、三十四年（一九〇一）帝国大学総長、三十七年（一九〇四）貴族院議員となる。四四年（一九一一）九州帝国大学総長、大正二年（一九一三）再び東京帝国大学総長となり、翌三年（一九一四）四月東宮御学問所評議員、八月京都帝国大学総長を兼ねる。四年（一九一五）には男爵を、九年（一九二〇）には勲一等瑞守章を授けられ、十二年（一九二三）枢密顧問官となった。

山川浩、健次郎兄弟はその赫々たる経歴を示しているごとく、体制内を生きた。恐らく藩閥政府の中を生きつつ、かえって会津を常に意識せざるを得なかったと思われる。兄は『京都守護職始末』を著わすことで、弟は「東宮御学問所評議員」となることで、少くとも〈朝敵〉〈賊軍〉の汚名と屈辱を結果として撥ね返すことになったのは事実である。

さらに言えば妹捨松の存在も無視できない。明治四年（一八七一）岩倉使節団が米欧回覧する際、捨松は女子留学生として渡米し、後国後鹿鳴館の花形として社交界へデビューし、のち薩摩の陸軍大将大山巌夫人となった。

綱淵は小説『苔』で、山川健次郎が〈枢密顧問官〉に任ぜられたことを踏えて、

体制内に深く参入して汚名雪冤の場を得ようという、兄浩以来の執念は、健次郎の枢府入りで一つの頂点をきわめたいといえよう。そしてついにその日がやってきたのである。

大正十四年（一九二五）一月二十三日、宮内大臣牧野伸顕から健次郎に呼出しがあり、会津松平家当主・保男男爵の姪、つまり容大の弟で、保男の兄である松平恒雄（当時駐米全権大使）の第一女節子を秩父宮妃殿下として入輿させたいという相談があった。（中略）〈勢津〉と改め昭和三年（一九二八）九月二十八日、御婚儀の式が挙行された。（中略）健次郎は言うに及ばず、旧会津藩の人々がすべてこの日をもって〈朝敵〉の汚名消滅の日と考え、感涙にむせんだ。昭和三年は寄しくも明治元年から六十年と一まわりした〈戊辰〉の年であった。会津人の胸中を去来する感慨ひとしおのものがあったであろう。

と記している。綱淵はこの山川浩、健次郎兄弟の体制内に入って〈朝敵〉の汚名消滅に腐心することで、斗南藩移住の失敗に対する責任の取り方の一例と見ている。

綱淵は山川健次郎の自筆メモ「雑記」の「府君（山川浩）は後仕官せられしが永岡氏（永岡久茂）ハ常に野に在り

て政府顚覆に志せり」の圏点部分（のちに訂正した所）に注目する。

〈府君は後仕官せられしが〉の初出の文脈は、《両君共に薩長政府顚覆論者なりしが六七年比に至り、府君ハ到底其の成り難きを見て、谷氏の勧誘にて仕官せられたる八六年の暮なる可し》（予洋行中につき委敷事ハ知らず）という記述であった。

次に〈常に野に在りて〉の初出は、《初論を変せず、常に》であった。

この覚書は大正十年（一九二一）に記されたものであるが、訂正はのちである。まさに体制内を生きるための配慮がここに伺われる。

次に広沢安任（一八三〇―一八九一）の生き方を見る。広沢は斗南が未開拓で広大な土地故に牧畜に従事することを心に決め、横浜で英国人ルセー及びマキノンの二人を雇い、斗南の三沢村を開墾し、牧畜に生涯を送った。明治九年（一九七六）天皇の東北御幸の折、旧知であった大久保利通内務卿の進言で、七月十二日、牛百八十頭、馬十九頭を三本木原に引き天覧に供し、かつ御下問を辱けなくし、金五十円を下賜される栄誉を受けた。

綱淵は斗南藩経営の失敗に対する責任の取り方として、「あくまでも現地にしがみついて開拓の実を挙げてみせることである。（中略）広沢安任が廃藩後採った立場であり、しかも見事にその成果をみせてくれた」ことであると記す。そして昭和の今日でも「広沢牧場」として「広沢安任の夢と精神はいまなお脈々と息づいている」と記している。

永岡久茂（一八四〇―一八七六）の場合を考える。藩校日新館に学び、藩より江戸昌平校へ留学を命ぜられた俊才である。廃藩後青森県の田名部支庁長となるが、官を辞して上京する。八年（一八七五）海老原穆（ぼく）（一八三〇―一九〇一）と「評論新聞」を創刊し、自由民権と征韓論を唱え、政府攻撃の論陣を張る。大久保利通、伊藤博文、井上馨にその識見を認められ、外務官僚のポストを勧められるが拒絶する。さらに、会津の鉱山の経営を約束するも拒否する。これより先、現政府の政治が維新の精神に反すると主張する前原一誠や奥平謙輔と親交を重ねる。

永岡は「前原より暗号の電信にて事を挙るの期を（錦の店開きは二十八日と、申越した由）」（「東京日日新聞」明治九年十一月十日付）知る。二十九日、永岡久茂、竹村信秀、中原成業、中根米七、井口慎次郎、一柳訪ら芝居茶屋の川島屋に集合、「（千葉）県庁に討入り、県令参事を殺し（中略）佐倉鎮台を襲ひ宇都宮を追撃せんと」（「朝野新聞」明治九年十一月十一日付）、日本橋小綱町思案橋から小舟を出す直前に警吏に通報され、乱闘の末、永岡は同志の刃にかかり重傷を負い捕縛される。翌十年（一八七七）一月十二日獄死する。世に言う〈思案橋事件〉である。

何故、永岡は杜撰な計画（書生二人が警視庁の密偵であった）を以て、無謀の挙に出たのであろうか。彼を駆り立てた激情は何であったか。自己嫌悪か、負い目か、はたまた怨念か。

綱淵は「永岡の立場は薩長政府に対する会津全体の怨念の立場」であり、その怨念は「挙藩流罪ともいうべき斗南藩の悲劇から生れたものだけではない」と言う。その根本的な所は、「斗南の悲劇というスクリーンを通して戊辰戦争を回想したときの、何層倍にも増幅される屈辱感の記憶である」と言い切る。それは「若松城攻防戦における政府軍のとった会津人にたいする非人間的な取扱いへの怒り」に発している。具体例を挙げれば、白虎隊員中の生捕りにされた少年たちをすぐ殺さず、少しづつなぶり殺しにしていったこと、会津側戦死者の遺体を放置して葬ることはもちろん手を触れることさえも許さず野犬狐狸の餌食たらしめたこと、これらの事実を会津の人たちは許せなかったはずである。これらの屈辱感、怨念を永岡久茂は一身に背負って立ったのである。勿論、成算などない。

永岡久茂のこの心情とこの決起を綱淵は「一死もって藩主および全藩士に謝罪する」という責任の取り方であったと看取している。

私は綱淵の見方をひどく面白いと思う。山川浩、広沢安任、永岡久茂のそれぞれの生き方は興味深い。山川は激情を捨てることで体制内に入る。入ってみるとかえって会津を意識することで、自己の才能を汚名を雪ぐことに賭けたと言えるのではないか。広沢は土着し開墾と牧畜を通して、所期の目的実現に賭けたのである。永岡のみが負い目と、自己の内面で制御不能な怨念が死を急がずにいられなかったと思って見る。

綱淵はこの「怨念」を「会津人の倫理観の厳しさとどこかでつながっているようにわたくしには思われる。敗北よりは転向を嫌うていの頑（かたく）なさが、その怨念を血肉化させてしまったものかもしれない。しかしそれが会津人の教養から〈はなやぎ〉を失う原因ともなっていないか」と興味深い見解を示している。

（4）

小説の最終章は、思案橋の現場から逃走した中根米七の最期を会津に追う。事件から二年後の明治十一年（一八七八）喜多方町熊倉の杉ノ下墓地で割腹した。綱淵は大きな墓石に虚を衝かれ、異和感を感じたと記す。「義士中根米七墓」〈明治二十二年五月十六日建之〉は「顕彰碑」であり、憲法発布による「大赦令」によって建立が可能になったと思われる。綱淵は「米七はあらゆる辛酸を嘗めて故山に帰り、故山の自然に抱かれてその土と化した。流氓として他国に果てた同志にくらべるなら、どんなにか幸せであったか」と思い直している。

顕彰碑と言えば、思案橋事件で永岡らに斬り殺された警部補寺本義久の墓碑と並んで燈碑がある。この燈碑について、綱淵は「殉職した寺本警部補の顕彰のために」初代の大警視（のちの警視総監にあたる）川路利良が「建立したものである」と記している。

この事実を踏まえて綱淵はその意図を次の様に見ている。

> 今回の事件が政府顚覆をもくろむ不平士族の暴発であることを重視した川路は、迫り来る西南戦争への戦意昂揚のためにも、第三号寺本義久の死を特別に染井墓地の一画に立派な顕彰碑として表彰し、殉職警官の栄誉をたたえ、遺族への政府の手厚い保障を顕示することで警官たちの後顧の憂えをなからしめようとしたのだと思われる。

「第三号寺本義久」とは、殉職した警察官の三人目という意味である。綱淵のこの見解は鋭く時代を見ている。

さらに言えば、西郷隆盛が創設した警察制度の邏卒（のち巡査）は薩摩人が多かった。制度を近代化しつつ組織の拡大をはかる折、朝敵の東北の諸藩から巡査を集めた。川路大警視にとって、西郷が兵を挙げた時、同志討ちを避けなければならなかった。薩摩討伐には東北出身の巡査を兵卒として送り出すことであった。会津の猛将といわれた佐川官兵衛などこれに応じて参戦、戦死する。永岡久茂と同様薩長政府を認めない佐川であったが、討つべき政府を討たずして、政府の命令に従って薩南へ出動していく。逆転したナショナリズムである。

明治政府は周到である。この時警視庁音楽隊を発足させ、東京大学教授外山正一に「抜刀隊」のうたを創らせた。この歌に送られて、警視庁抜刀隊は薩南へ、薩南へと行軍していった。

綱淵謙錠の〈亡国の民〉〈流浪の民〉会津へ寄せるまなざしは暖かい。その共感の源はその出生の地にある。樺太で生まれ敗戦までそこで育った綱淵もまた〈亡国の民〉であり〈流浪の民〉であるからである。

注

⑴ 『警視庁史　明治編』（昭和三十四年一月一日、警視庁史編さん委員会）所載の「第二十九　思案橋事件」、一二〇頁―一二一頁。
⑵ 三宅雪嶺『同時代史』第一巻（一九四九年七月一〇日、岩波書店）、四九一頁―四九二頁。
⑶ 尾佐竹猛『法窓秘聞』（昭和十二年九月三十日、育生社、のち復刻版として一九九九年一二月一〇日、批評社から出版）所載の「思案橋事件」、一四一頁―一六六頁。
⑷ 葛西富夫『斗南藩史』（昭和四十六年八月二十八日、斗南会津会、〈非売品〉）、一〇五頁―一〇九頁。
⑸ 『明治史要』〈東京大学史料編纂所蔵版〉（昭和八年十月十日刊行、昭和四十一年十一月三十日覆刻、東京大学出版会）、一七二頁
⑹ 地方官の呼称で、「知事―正大参事（副知事）―権大参事（副知事）」という職位である。新政府は会津に対して最初から「正大参事」以上を欠官としている。明らかにここに懲罰意識が働いている。「少参事」は補佐と考えればよい。
⑺ 注⑷に同じ。ただし、一一六頁。
⑻ 石光真人編著『ある明治人の記録――会津人柴五郎の遺書』（昭和46年５月25日、中央公論社）
⑼ 『戊辰殉難追悼録』（昭和五十三年十一月十日、財団法人会津弔霊義会、非売品）、十五頁―十七頁。
⑽ 『京都守護職始末』〈旧会津藩老臣の手記〉Ⅰ・２（昭和40年８月10日、41年２月10日、〈東洋文庫〉49・60、平凡社）

――二〇一三・一二・一七――